



TITLE:

# フィアカントの社會學論(四)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. フィアカントの社會學論(四). 經濟論叢 1924, 19(5): 647-674

ISSUE DATE:

1924-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128223>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 五 號      第 十 九 卷

大正三十一年十一月一日發行

## 論 叢

娛樂税の構成……………法學博士 神戸 正雄

フイアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

獨占の本質……………文學博士 高田 保馬

天保時代の西陣……………經濟學博士 本庄榮治郎

## 時 論

小麥及小麥粉關稅引上是非……………法學博士 河田 嗣郎

營業稅廢止論を評す……………法學博士 小川郷太郎

## 說 苑

リカアドの價值論に就て……………經濟學士 森 耕二郎

## 雜 錄

政府の輸出貿易振興策に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

獨逸最近の乳兒死亡率……………經濟學士 岡崎 文規

# フイアカントの社會學論 (四)

米田 庄太郎

## 五 「社會學」に於ける社會學論

今フイアカント氏が本書緒言に於て述べられて居る中に、同氏の社會學論の主旨を甚だ簡明直截に表示して居るものがある。此處に先づ其等の言述によりて、同氏の最とも完成せる社會學論の主旨を簡單に約説すれば、如何なるものであるを示して置く。

### A、緒言中に於ける社會學論の簡明なる約説

夫れ本書は結婚の原史を取扱ふものでも、國家の起源を取扱ふものでもない。夫れは歴史的な活の法則或は普遍的に現はれる文化階段を探究せんとするものでない。夫れは又社會的高上や職業の本質を論ずるものでも、社會政策或は刑事統計を取扱ふものでもない。同様に人種問題、或は文化が自然淘汰の上に及ぼす影響、或は此の點に於ける戦争の作業などを論究せんとするものでない。本書の對象をなすものは寧ろ、直接に社會生活其物の最後の形式、勢力、及び事實並に一切の歴史的變動を離れて社會の本質から隨起する構成物である。されば本書の目標は根本的に

は、ジムメルが既に思ひ着いたが、併し當時の研究狀態に於ては尙ほ到達し得られなかつた其の目標である。而して此の目標は今や現象學の發達において始めて到達し得られるものとなつた。現象學の發達は吾人をして全然新しき仕方で、最後の先天的事實の包括的系列を確定することゝ、可能ならしめるのである。夫れは社會學の範域に對して、事實の無限な豊富を原現象の比較的になき數（小なる基本）に、合理的自然科學が一切の現象を最後の要素及び自然法則から引き出すと同様な、併し同時に又全く異なる仕方で、還元する可能性を吾人に與へ、夫れと共に更に、經驗的歸納的な、屢々大なり小なり偶然的な類型の代りに、事物の「本質」から當然隨起すると云ふ點に於て、一の無制約的な論理的優勝性を有するが如き類型を、設定する可能性を吾人に與へるのである。

内容に關してはまさしく右の方法によりて、一切の社會的生活は其の運載者の一の特殊な内部的狀態を意味すると云ふ事、即ち一切の外部的順應關係及び實用關係から根本的に異なれる一の特殊な内部的結合性を、夫れ自身の中を含むと云ふ事が、自から生じ來る。かくてテーニスが一の特殊的生活形式としての共同團體の彼の發見に於て始めた仕事が、此處に徹底的に完成されたのである。

本書は云はゞ社會生活の範域に於ける正當なる範疇の使用に一示導を與へんと欲するもの、即

ち社會的事實を何等かの結合に於て取扱はんとする各人に、一の概念網を與へ、而して彼の對象の特に社會的なる方面に對して、正當なる見當をつけることに於て、彼を助けんとするものである。

本書の主要なる諸章に於て、段々に強く現はれて居る原動的な根本思想は、近世的全體思想 (der Moderne Totalitätsgedanke) である。此の思想は全體が總ての部分因果的に規定する處の構成物の存在することを主張する。此の場合に各全體は全く個性的なる或物である、或は一の顯著なる個性、かくて一度的及び獨特的な或物であることへ云ひ得られる。夫れは常に自己特有の法則に従ひ、而して殊に其の發達は只夫れ自身特有の法則からのみ理解されるので、合理的科學の分析的形體に於て普遍妥當的な法則から引き出されないものである。此處に又創造的發達或は動的因果の名の下で知られる思想が主張されて居る。其の思想は今日は實驗心理學に於ての如く自然哲學に於て、又構成されつゝある精神科學的心理學や歷史科學及び文化科學に於ける如く歷史哲學に於て、一般に著しく現はれて居る。(其の代表者として此處に只 Wolfgang Köhler und Wertheimer, William Stern, Spranger und Troetsch 等の名を擧げれば足りると思ふ。) 而して今目前に見る處の右の思想の進展に於て、第二十世紀の學的生活が現はすであらうと思はれる新しき相貌、及び前世紀の自然主義及び器械論的考へ方に對する觀想の最も深大なる一變動が、明らか

に示されて居るのである。

「社會學」の緒言中に見出される右の言述は、フイアカント氏が自から其の最とも圓熟せる社會學論の主旨を、甚だ簡明に約説せるものとして、吾人の注意す可きものである。是れより終りに、「社會學」の序論に於ける同氏の社會學の最後の（今日までの處で）組織的な詳しき論述を考察したいと思ふが、其の中にはさきに「形式社會學の考案」中に論述された事が多々取り込まれて居るから、出来るだけ重複を避けて述べることにする。

#### B、序論に於ける社會學論

本序論は社會學論を論じたものにして、第一節近世社會學に於ける二つの主要方針、第二節社會學に於ける個々の諸方針、第三節形式社會學の三節に分たれて居る。

フイアカント氏が近世社會學に於ける二つの主要方針と云ふは、さきにも述べし如く、歴史哲學的百科全書の方針と分析的形式的方針とである。前者はコント、スペンサー等より傳はれる舊方針にして、後者はジムメル、テーンニス等によりて創説されたる新方針である。舊方針は人類の文化及び歴史を全體として又全體に於て把握するを、其の最高目的となすものにして、夫れによりて一般の識者や又屢々精神科學者をも大に牽引するのである。併しまさしく夫れが爲めに特殊な諸困難や、獨斷主義及びディレッタンチズムに陥る危険を有する。

新方針の特價は先づ第一に二つの事實に存する。第一には吾人の知識の確實及び進歩に對する分析の重要なことに存するのである。新方針は社會的生活の最後の元素に遡らんとする。是れ社會圈の大きさ、持續性及び内容等から離れて、一切の社會的生活に結び附けられる形式及び關係は、社會的生活の最後の元素の事實であるか、又はかゝる事實に分解されるものであるからである。此處に只一度自然科學的範域から夫れに比す可き一例を示す爲めに、余輩は天體力學の範域に於けるガリライ、ケプレル及びニュートンの基本的作業を憶ひ起すこととする。其等の人々の以前に於ては自然の一の定質的考察、云はゞ全體からの一の研究法が一般に行なはれて居た。然るに其等の人々によりて、之に代りて定量的測定及び數量的分析の一方法が起つて來た。而して夫れによりて全然新しき見地が得られ、新しき問題提出法が行なはれて來たのである。まさしく吾人は一般的に左の如く云ひ得る。即ち全體考察 (eine Totalitätsbetrachtung) は或意味では常に物の表面に停滯し、只一の平面形象を與へるに止まる、而して只分析のみが、最も都合よき場合には、從來思ひもよらなかつた深みにまで進入し、夫れによりて全然新しき啓示を與へ得るのであると。今右の二つの相異なる態度に、大體上社會學の二方針が相應するので、而して只新しき方針のみが、深入的分析の方法を行なふのである。但し此の方針に於ても、天體力學に於けると同じく、只分析のみが行なはれるのでないことは云ふまでもない。其の事はとにかく、形

式社會學の若い學科は、右の方法によりて四つ又は六つの「ガリライ」的發見を以て、吾人の知識を富ましたことを既に誇り得るのである。其の一は服従或は心服本能（der Unterordnungstrieb）にしてタールド及びマク、ツーガルの發見、其の二は社會的基本關係にしてテーンニス、シュタウチンガー及び著者（フイアカント）の發見、其の三は社會的關係は一般的に規制されて居るといふことにして、シュタムラー及び著者の發見、其の四は共同團體關係は餘他の基本關係以上に重要なものなることにして、著者の發見。而して次の二つの事實複合にありては、「發見」の性質は前三者に於ける程明らかに認められない。それで此處には附録的に擧げて置くが、其の一即ち前から數ふれば其の五は、自我（自我意識）及び自己感情が個人以上に擴大すること、及び我等意識并に集團的自己感情の存在する事である。此處にも亦マク、ツーガルは一部分發見者である。其の二即ち其の六は只新陳代謝する個人のみを運載者とする處の社會的なる客觀的構成物の存在する事である。是れは夫れ自身に於ては既に永い以前から知られて居たが、併し近頃に至るまでは根本的には把握されなかつたもの、又十分には運用されなかつたものである。

新方針の特價として第二に擧ぐ可きは、只其の方法によりてのみ、基本概念及び基本知識の確實性が保證されると云ふことである。只其の方法のみが、他の方法が主として思辨、演繹及び構想に傾く場合に、基本概念の論理的に確かめられたる精密なる確定に進み行くのである。形式的



方針は思辨や演繹や構想とは反對に、大なる度合に於て直觀の範域、殊に直接明證的な直觀の範域に止まり得る。是れ社會的生活の最後の基本事實は、總て吾人が日常の體驗に於て直接に接し得るものであり、又夫れ故に本質觀照 (Wesensschau) の途に於て明らかにされ得るものであるからである。かくて形式社會學は大なる部分に於て、社會の現象學と合致するのである。

社會學的分析的方針は少なくも其の現狀に於ては、確かに吾人の時代の一要求即ち總合の要求を充たさないであらう。此の要求が吾人の時代の一要求と云ひ得られるのは、是れ今日多くの方面からして、社會的生活の範域に於ける多數の個別的知識を、一の全體形象に於て結合せんとする願望及び努力が、起つて居るからである。而して此の願望を充足することが一般的に可能である以上、從來實質的な歴史哲學が企だてしと同じく、社會學の第二の方針は之を充足する。而して此の見地に於ては、歴史哲學の舊名稱を社會學の新名稱によりて取り替へんとするは、一般的に正當であるや否やは疑問である。確かに分析的方針は實生活の實在及び豊富から大に抽象することに基いて立てられて居る。併し夫れは此の點に於て、只一切の科學の本質を分有して居るだけである。何れの特殊科學も現實の完全なる形象を與へるものでない。されば生活が常に科學の偏局性に對して抗議を呈出して居るのは、當然である。而して夫れよりして科學に對しても亦、總合を求める聲が起る。併し科學は哲學から離れて、かゝる全體形象を一般的に構成し得るもの

なるや否やは疑問である、否な此の問題は恐らくは斷然否定的に答へらる可きであると思はれる。

フイアカント氏は近世社會學に於ける二つの主要方針に就て、以上述べしが如くに論評したる後、更に社會學に於ける個々の諸方針を概論して居るが、同氏の列舉せる諸方針は左の如くである。

- (1) 社會學的考へ方
- (2) 歴史哲學としての社會學
- (3) 文化社會の本質の學としての社會學
- (4) 自然科學的社會學
- (5) 人種論としての社會學
- (6) 種族の社會的及び精神的文化財産論としての社會學
- (7) 社會團體の諸性質論としての或は相互作用及び其の生産物の理論としての社會學、

フイアカント氏は右の七つの方針を區別して居るが、同氏自身は(7)の方針を遵奉するものであることは、さきに述べし處によりて察知されるのである。而して同氏は右の七つの方針を概觀すると三つの區別を立てる必要が覺られると云はれて居る。夫れは(1)社會學的學問と社會學的方法との別、(2)組織的問題と歴史的問題との別、(3)純正社會學と應用社會學との別である。尙ほ同氏は此等三つの區別間に、認識過程に於ける一定の依存關係を認めることが必要であると云ひ、而して社會學的方法の運用は一部分社會學的學問の状態に依存すること、純正社會學は應用社會學

に先行し、組織的知識は歴史的知識に先行す可きことを述べて居る。

尙ほ同氏は右の七つの方針中に現はれる社會概念の三つの相異なる見方を論じて居るが、其の一是社會を一全體としての當代の文化の運載者としての性質に於て考へられたる、全體としての人類、或は個別國民、或は個別種族と解するものである。此の見方によれば一切の文化現象は社會と稱せられる一の單一不可分な主體の諸性質として現はれる。而して此の統一體内に於ける夫れ以上の區分或は節合は考へられて居ない。要するに此の見方は全く、學界に熟知されて居る有機的國家論及び社會論の方針に従ふものである。但し此の方針は國家的或は國民的生活の統一を尊重するが、其の節合、其の多様性及び緊張を尊重しない。

第二の見方は社會は獨立に並存する個人から成立し、其等の個人の諸性質が社會の諸性質をなすものと見る。而して此の場合に先づ第一に個人の身體的諸性質が考へられて居る。是れ此處に考へに入れられるものは先づ第一に自然科學的諸方針であるからである。而して此等の諸方針の根柢には第一の見方に著しく反對して、社會の元子論的見方が存在する。されば吾人は此等の諸方針の研究の基礎物を社會としての代りに、社會身體或は社會體 (Gesellschaftskörper) として表示することが出来る。而してかゝる前定によりて、其等の諸方針の研究の結果が混濁されるや否やは、其の問題呈出の仕方によるのである。終りに第三の見方は最も新しき見方にして、夫れ

は統一の思想に節合或は分節の思想を加へ、而して同時に文化の事實を考察外に置く。かくて此の見方は社會を一の節合されたる或は分節されたる一全體と解し、又其の成員間の相互作用の研究を中心とするに至るのである。

終りにフイアカント氏は同氏の遵奉する方針に従ふて立てたる形式社會學の主要問題を約述して居るが、其の所説によれば、吾人は先づ形式社會學は團體内の諸關係（Beziehungen und Verhältnisse）及び其等の諸關係の生産物を取扱ふものであると云ふことが出来る。舊方針は之れと異なり、其等の生産物其物、かくて文化社會の特殊な場合に於ては文化の現象其物を、社會の客觀化物として考察するに限る。而して此の方針は分析への傾向を、殊に人種闘争及び階級闘争（夫れに於て團體の統一性が部分團體の緊張によりて横斷される以上）の現示及び取扱ひに於て示す。さはれ此の方針は此の場合にも矢張り只社會の國家的國民的形體を取扱ふだけで、個々の階級は更に分析されることなく、完全に統一體として認められて居るのである。

余輩は形式社會學の問題を決定するに當て、先づ團體の生産物を看過したが、更に他の見地の下に於て形式社會學の二つの主要問題を擧げることが出来る。兩者共に舊き歴史、コントにより始めて學界に引き入れられた社會學と云ふ名稱よりも遙かに舊い歴史を有する。其の一は社會の特殊的諸力（die spezifischen Kräfte der Gesellschaften）の問題である。吾人は日常生活に於て

此等の力を普通に道德的力と稱し、國民的國家的社會の特殊な場合にありては、好んで國家の力に對立させる。而してまさしく此の問題に關しては、既に啓蒙時代に於て、プリンクマンの指示せる如く、ホッブス或はグロチユウスの仕方に従ふて、最初の社會學的研究が發達した。同じ意味に於てエーリツヒは「社會學は社會的事象が行動する個人の意志に歸せられず、夫れから獨立して社會に於て作用する力に歸せられるや否や、始まるものである」と云ふて居る。ゾエルケム自身も本問題を種々なる方面に於て、巧妙に取扱ふた。服從の自發的性質に關するタールドの分析も、同様に重要なものである。而して又マク、ゾーガルの同じ事柄に關する研究も、假令心理學の見地から行なはれて居るとは云へ、矢張り本問題の研究の一と認められる。獨逸にありては總ての人々に先だちて、ジムメルは此の方針を發達させた。此處に主として、知力下の、注意されない或は無意識的な諸力が取扱はれて居るので、而して夫れが爲めに其等の力は、今日まで十分徹底的な分析に附せられなかつた。

第二の主要問題は、社會は一の自然的構成物であるか又は一の人爲的構成物であるかと云ふ舊い問題、かくて個人主義と集團主義との對立から生起するものである。而して夫れは吾人が正當なる見地から考察する時には、社會に於ける人間の内部的結合の仕方に關するものである。此處に總ての人々に先だちてテーニスは、ゲマインシャフト共同團體及び夫れと吾人がゲゼルシャフト社會と稱する、より緩き結合

形式との區別に關する研究によりて新生面を開いた。而して此の問題の研究からして、一の光明が第一の問題に投せられる。是れ道德的力を云々することは、一般的に只一團體の成員間に、外部的關係とは異なる他の關係が存立すると云ふ前定の下に於てのみ、意義を有するからである。而して此等の力の性質に關する研究は、社會内には内部的結合の一の特殊な狀態が存立すると云ふ前定の下に立ち、又同時に之を確かめるのである。

尙は一の特殊な見地の下に於て、即ち方法の方面に就て（而して夫れと同時に又内容の方面に就て）此處に吾人は二つの部類を分ち得る。一の中心的部類は社會の本質及び社會的行動並に關係一般の問題を中心とするものである。而して其の方法は現象學的である。蓋し社會的生活は心的生活と同様に直接に吾人に與へられて居るからである。今や吾人は、人事は總て特種な本質性を有し、而して夫れは外界との比較に依て明らかにされるよりは寧ろ曇らされるものなるを知る。かくて人間社會の本質も亦、只直接な課題に於て、又同時に直接に與へられたる事實に於て止まる處の、一の全く獨立なる考察法によりてのみ、明らかにされ得るのである。而して此等の事實とは、吾人の各々に於て絶へず行なはれるが如き、社會的狀態の體驗である。

現象學的方法是社會學に於ても亦、其の有效性を發揮するのである。併し社會學に於ける此の方法の適用に就ては、殊に左の非難が起る。即ち社會的事實の各徹底的分析は、社會的生活の一

の抽象的圖式に於て止まることが出來ず、其の特殊的諸形式の中に没入せねばならぬであらう。此の非難が正當であるや否やは、云ふまでもなく只實際の研究のみが之を裁決し得るのである。

問題の第二部類は一般的なる經驗的事實に結び附く、而して事物の歴史的多様の一般的概観によりて、歸納の方法に於て答解される。例へば吾人は歸納法によりて、權力使用が永續的に行なはれる場合には常に規制されて居るとか、又は連帶は個人に對して有益でないが團體に對して有益であるとか云ふが如き洞見に達する。然るに服従本能の本質や或は契約關係の本質などは、吾人は現象學的に之を把握するのである。人間の行動に於ては規制が汎く行なはれて居ると云ふことは、只經驗のみが示し得るものである。併し此の規制が内部的には如何に作られて居るかは、現象學の範域に屬する問題である。かくて吾人は一般的に左の如く云ひ得る。即ち内部的なる社會的狀態の本質は現象學的高上の體驗として把握し得られるものにして、而してかゝる狀態の擴張、及びかゝる狀態が一定の外部的狀態と結合すること、云はゞ夫れが一定の外部的關係に於て具體的に服裝することは、只經驗によりてのみ確定され得るのである。前者にありては觀念的構成物が取扱はれ、後者にありては其の現實的具體化が取扱はれて居る。而して只其等の具體的服裝、其の諸大類型、諸性質及び規律性の一般的概観のみが社會學の一般的部門に屬するのであ

る。此の場合に吾人の取扱ふ可き事實は、最早純社會的性質のものでなく、夫れは又社會外的諸力の一系列によりて規定されて居るのである。かくて家族は共同團體關係の一特殊形式であるが、併し夫れに於ては又性慾本能、生殖、及び經濟的事實が夫れ夫れ重大なる役目を演じて居る。又國家は一方に於ては權力關係、權利關係及び共同團體關係の一混合物であるが、他方に於ては夫れは領土的、地理的及び經濟的諸勢力によりて強く影響されて居る。されば此處に吾人の取扱ふ可き諸概念は、社會學の見地から見れば、全く組織的概念でなく、他の經驗的諸因素の混合の故を以て、歴史的概念として認めらる可きものである。かくて權力關係は一の組織的概念であるが、之れに反して其の特殊形式としての階級關係は、一の歴史的概念である。同様に國家及び國民は社會の歴史的形式である。有名なる一哲學者が尙ほ最近に於て、權力の本質を國家から定義せんとしたのは、此の學問範域に於ける研究の不完全なる狀態を表示するものである。實際に於て國家は權力關係が具體的に形成される一の「場處」である。併し權力關係其物は一の直接的本質把捉によりて接近し得られる處の、普遍的に汎く行なはれる基本關係に屬するものである。此の際まさしく國家に於て權利關係が完全なる發展に達するのであると云ふ考へが、頭に浮ぶかも知れない。しかも尙ほ吾人は此の發展の場所を、發展するもの其物の本質から區別せねばならぬ。かくて國家から權力を概念的に引き出さんとするは、順序の顛倒である。同様に法律及び慣習の



概念は、余輩の見地から見れば、歴史的概念である。されば此等のものを、純粹に其の本質から定義せんとすることは、決して満足なる結果に導かない。之れに反して法律及び慣習の上位概念として適用され得る規範及び命令の概念は、組織的性質のものである。而して吾人は此等二つの構成物が慣習及び法律として實現される「場所」を尋ねる時には、満足なる一結果に達するのである。右に述べし歴史的概念と組織的概念との區別は、此の場合に於ては經驗的概念と先天的概念との區別に合致する。但し此の合致は云ふまでもなく、必然的でない。組織的概念は又經驗的性質のものであり得るのである。

却說以上論述せる基礎の上に、廣大なる諸研究が發達し得る。一方に於ては一切の文化財に於て一定の團體間の相互作用の客觀化即ち生産物を認める一一般的文化論 (eine allgemeine Kulturlehre) が發達し、他方に於ては人間生活の個々の基本現象を、其の特殊的な歴史的發展に於て考究する一特殊的社會學 (例へば自然人民の諸種の社會的編制に於ける組合的關係、高等文化人民の國家及び階級組織に於ける支配的關係、男子團體或は國家に於ける共同團體關係等の如きものを、夫れ夫れ考究する特殊的社會學) が發達し得るのである。而して其等の問題部類に於て、夫れ夫れの歴史科學との關係が如何に定められるか、此處では其等の歴史的諸科學と社會學との間の境界地が取扱はれるか、或は嚴密に云ふ社會學が取扱はれるかと云ふが如き問題は、第

二次的な問題である。夫れは恰も形式社會學が、其の今日有する狭い範域に於て正當に一科學を形成するか、又は只比較的によまされる一問題部類を形成するに過ぎないかと云ふ問題と、同様な問題である。研究が成就される以前に、吾人は其の論理的性質を詳しく判斷し得ないであらう。總てが尙ほ生成中にある處では、吾人は他の比較的に完結せる知識範域から移される概念を、只保留を以て適用し得るだけである。此處に只一謬見に就て警告を與へるに止める。夫れは研究の單なる資料が如何様にか社會學的概念によりて把捉される場合、例へば一定の法律の階級的性質、或は一定の社會的編制の權力意志などに關する研究に於て見られるが如き場合に、其處に最廣義に於てすらも社會學が既に研究されて居ると見ることが、正當であるが如く考へる謬見である。かゝる研究は只、完成せる文化構成物が其のまゝで研究の對象となるのではなく、併し其等の文化構成物の裏面に行なはれる處の、團體内に於ける相互作用の働き（此くて其等の文化構成物其物は其等の相互作用の働きの沈澱物と見做される）が研究の對象となる場合にのみ、社會學的と認め得られるのである。而して形式社會學は其の現象學的組織的基本問題を研究する外に、又右に述べしが如き歴史的諸類型の區別の始めをも取扱ふのである。

されば形式社會學は其の研究の發展に於て、舊方針と同一の問題を一部分討究するであらう。形式社會學は其等の問題を避けんとするものでなく、只廻り道をとらうとするだけである。是れ

そうする事によりて、己を深め、又批判的精神を以て己を固める力を集積する爲めである。かくて形式社會學は、既に述べし如く是れまで一の本質的欲求を不完全な仕方で満足させたに過ぎない舊方針に、眞に取り代り得るであらう。

形式社會學は精神科學或は社會學を應用せんとする生活の實際政策に對して、かの數學が物理學或は技術に對すると類似的關係を有する。數學は物理學を要しないが、併し物理學は數學を要する。而して數學は物理學或は技術に對して、始めには彼等の欲求に心を煩はすことが少くないほど、而して自分の發達を只自分自身の關心によりてのみ決定するほど、愈々有益なる奉任をなし得るであらう。かくして數學は自分の發展の爲めにより大なる自由を保有し、而してそれによりて又其の發見に於て、他の學科の目的或は實際的欲求の目的に適用され得る贈物を呈供する、より大なる可能性を獲得するのである。

却説余は以上五節に於てフイアカント氏の社會學論を、其の發達に従ふて稍々詳しく考察したのであるが、是れ同氏はジムメルの始めの粗雜なる純正社會學論を詳し、發展させた最初の社會學者であるのみならず、更に今日までの處では之を實質的に展開して純正社會學の稍々完成せる體系を詳論せる唯一の獨逸社會學者であるからである。(フオン、ウイゼ氏も「關係及び關係構成

物論」として同氏の純正社會學の體系を公にされると云ふことであるが、まだ公にされて居ない様である。）されば今日純正社會學論の研究に於ては、フイアカント氏の説は最も勝れたる一標本と見做し得られるので、余は同氏よりも先きに大體上立てた余の純正社會學論を、同氏の説と比較することによりて學ぶ處少なくない。而して今日大成されたる同氏の社會學論に於て特に注意す可きは、社會學に於ける現象學の適用に關する方面であると思ふ。余が始めて余の純正社會學論を立てた際には、まだフッサールの現象學は學界に喧傳されて居なかつたので、而して當時喧傳されて居たのはベルグソンの直覺或は直觀の概念であつたから、余はベルグソンの直觀の概念を多少改變して、社會學上直觀法を適用する必要を説いて居たのである。然るに其後現象學を學ぶに當つて、余の所謂直觀法なるものを修正し且つ深化する必要を感じつゝも、他の諸問題の研究に力をとられて居たが爲め其のまゝになつて居たが、今フイアカント氏の説を論究する隨手に特に社會學との關係から見て現象學を考察し、而して余の所謂直觀法なるものを修正し深化したいと思ふ。殊に近來現象學者はフッサール氏自身を始めとして社會學の問題に手を着け始めたから、余輩は今日社會學と現象學との關係を研究するに就て、大なる便宜を與へられて居る。それで余は次に「社會學と現象學」と題して此の問題を考究することゝする。